

である。之を検するに *Scutigerebella* ではなく近縁の *Hanseniella* たること明瞭である。高桑氏は廣義の *Scutigerebella* として御回答になつたものと推測するが、其意味では誤ではない。但し今日 *Scutigerebella* と *Hanseniella* とは明瞭に區別せらるべき別屬である。岸田氏採集の阿里山産も恐らく臺南のと同種なるべきを信ずる。柳原氏はヒメムカデと假稱せられたがコムカデ(秋山蓮三氏, 1914), ムカデモドキ(石川千代松氏, 1916), ヒメムカデ(柳原政之氏, 1936), コヤスデ(岸田久吉氏, 1936), 等の概稱中、予は曾て記した様な理由(植物及動物 vol. 3, p. 1544, 1935) からコムカデを現在も將來も使用する積りである。

結語としてコムカデは(1)柳原氏の調査により臺灣全島に産し蔗園に於ける重要有害多足類なることが判明した。(2)其種類はナミコムカデ科の1種 *Hanseniella* (*Hanseniella*) sp. であることを重ねて記し、目下尙観察中であるから他日詳報の機あるべきを約する。王雨卿・柳原政之兩氏の御懇情に衷心よりの謝意を表明し、併せて浩瀚なる内外普通動物誌の著者であり、“コムカデ”の名附の親たる秋山蓮三氏の御長逝を哀悼するものである。

雜 錄

Top minnow の一腹の胎兒の數

昭和11年(1936)8月7日沖繩縣島尻郡眞和志村^{マラジ ヨギ}與儀在沖繩縣立農事試驗場を距る約1丁にある小流(灌漑用田溝にして川幅2~3尺、當時川水は停滯してゐた)にて採捕したタツプミノオ *Gambusia affinis* 18尾(10尾雄, 8尾雌)中雌は何れも懷妊しその腹部豐滿して出産の近きを思はしめた。筆者試みに腹部を切開してその一腹の兒數を検したるに次の結果を得た。記して以て忘備とし度い。尙標品第4番の胎兒は發育進み既に卵膜を脱して居り一部は分娩されたものと思はれる。親魚の年齢を推定すべく鱗を剝取り低度の顯微鏡にて調べて見たが scale ring に濃淡を認むることが出来なかつた。さりとて當歳のものとは思はれない。これは周年溫暖の地では季節に依り魚體の成長に遲速がない爲めであらう。タツプミノオは現在では石垣島(最初この島にマラリア病原蟲の天敵として移入された)のみならず、沖繩本島全土にも野生し、メダカと共に極く普通に見られるものである。(犬尾三郎)

標品番號	體 長 (吻端より尾鰭末端迄)	胎兒數
1	28	21
2	32	16
3	28	13
4	28	5
5	30	11
6	28	14
7	26	8
8	26	9

Sardine の標識の仕方

洄游魚標識放流の目的はその魚種の何たるを問はず常に同一であるが、標識(tagging)の方法に就ては從來標識せんとする魚の體形竝に大きさ等に依り種々考案されて來た。(魚體の一部に損傷を與へて之を標識とするものもある。) California Division of Fish and Game では 1936 年春以來 Biological Board of Canada と Provincial Fisheries Department of British Columbia との連絡試験を行ひ北米太平

洋岸の sardine の標識放流を開始した。北海區では漁獲される sardine は漁獲から製品 (主として fish meal, 魚糧に製造される) となる迄に直接に人の手を以て取扱はれる時がないから鯖や鯖でやるやうな外部標識 (external tagging) の仕方では再捕魚の tag 回収がうまくゆかないのでここでは體內標識 (internal tagging) の方法を適用した。手術の原理は至つて簡單で、鋭利なナイフで魚體の腹側に小孔を開け、内臓と體壁との間に tag を挿入するだけのことであるが、これには内臓を傷けないために相當の熟練を要すると云ふ。用ひた tag の寸法は次の通りである。長さ $\frac{3}{8}$ 吋, 幅 $\frac{3}{8}$ 吋, 厚 $\frac{1}{4}$ 吋の鍍ニッケル銅薄板。この方法は外部標識法に比して tag の破損, 喪失の少いこと, 持の良いことで後者に優るものである。Tag の回収は全然人手に依らず製造工場で電磁石に依つて自動的に sardine の體內から追出す趣向となつてゐる (Pacific Fisherman, vol. 35, no. 7, June, 1937, p. 43 より)。 (犬尾三郎)

新 著 紹 介

PAGE, I. H. : Chemistry of the Brain. Springfield and Baltimore (C. C. Thomas). 444 pp. (1937).

序言に斯う書いてある, 「……合衆國では神経病及び精神病患者で病院に收容されてゐるものが50 萬人を超える……これは重大問題で……精神病學の進歩には腦の化學的研究が不可缺のものと信ずる……」。これでも判る様に, 著者は腦病理の生化學的研究に携る人で, 依つて以つて本書に盛られた内容の一般的傾向が察せられよう。而も特に強調するに "rôle of lipids" を以つてし, その理由として腦が主としてこの物質から出来てゐる事と, この物質の化學及び新陳代謝が殆ど知れてゐない事の2つを擧げてゐるが, 要するに著者の専門がこれだと言ふ事の別の形の表現に過ぎない。斯くの如く, 内容に偏りのある事は免れないが, それにも拘らず腦の化學に關する専門的的特殊常識を得るには恰かな著書である。

これは最初に斷るべきであつたらうが, 本書は普通我々の馴染んで居る著書の一般形式を履んで居ない。最も單的に云へば, 著者の持説に従つて編輯した綜合抄録である。尤も大概の教科書は斯うしたものであらうけれども, それを隠さずそれなりに明瞭にした處に特徴があらう。例を第9章の Comparative and developmental neurochemistry にとると, 章の表題の下に, これの内容をなす NEEDHAM : Chemical Embryology (Cambridge University Press, 1931) と ARON : Biochemie des Wachstum des Menschen und der höheren Tiere (Oppenheimer's Handb. d. Biochemie, Bd. 7, 1927) の2著を掲げ, 更に本文中必要個所に應じて, この兩著に引用されてゐたであらう處の文獻約40を, 脚註して参照してある。

本文 430 頁, 全16章に亘る記述が全部是式であるから, 考へ様では原著として大した價值のない, 單な寄せ集めだと云ふ物足らなさ, 物詰らなさも感ぜられ様が, 又見方によつてはこれ程確かな, 便利で親切な書物もあるまいと思はれる。腦の化學に關して最近の動向を知り度いと思つたら, 該當する章を讀めば可なり詳しい而も信頼するに足る知識が容易に得られよう。兎に角誠に便利である。

少々長くなるが各章の表題を掲げて置く。 Thudichum and the genesis of brain chemistry; Sterols; Phosphatides; Fatty acid metabolism; Cerebrosides; Carbohydrates; Nitrogenous metabolism; Electrolytes and gases; Physical chemistry; Enzymes of the brain; Comparative and developmental neurochemistry; Metabolism of the central nervous system as measured by gas interchange; Pathological gaseous metabolism; Diet, vitamins, and degeneration of the nervous system; Oxidation in the brain; The brain and thought. (武 部 啓)